

区民総ぐるみの金沢まつりをめざして

金子 博

- 一——観光金沢祭の始まり
- 二——新しい「金沢まつり」の復活
- 三——一〇年の歩みの中で
- 四——「金沢まつり」のこれから

一——観光金沢祭の始まり

戦後、旧軍隊の廠舎、工場跡地などに義務教育のための学育施設が次々建設をみ、関東学院、横浜高校、さらには横浜市立大学・関東学院大学などが開校され、諸々の官公庁・公社が開所されるなど復興のきざしが当金沢の地に急激に訪れました（昭和二十一年～昭和二十三年）。

（八月一日）によると、人口五一、七六五人で、一一、六九四世帯でした。昭和二十六年一月十五日に史跡称名寺保存会ができ、二月十一日伊藤博文公憲法顕彰記念碑除幕式が夏島で挙行され、史跡の地「金沢」が観光地として再生をみたと言つてよいでしょう。

同年三月十五日金沢観光協会が区役所内におかれ戦後の観光金沢が船出をみました。長老の話によると、京急「八景駅」前の国道沿いに公衆便所を設けたのが観光事業の始まりだったということです。

夏の海水浴場も、観光事業の一環として営業を開始、貸しボートなども利用客が

多数で賑ったそうです。記録によると、同年「金沢区観光まつり」と銘うって金沢みなと祭が開催されました（七月十日）。戦後の復興が著しく進展を遂げるなかで、辺境ながら、戦時色に町全体が覆われていた雰囲気次第に払拭され、史跡と文化の町の再現に旧住民の意志が燃えあがったと言つても過言ではないでしょう。

翌昭和二十七年から昭和三十二年に至るまで、納涼花火大会から金沢カーニバルと名称はかわりましたが、朝日新聞社と商店街のバック・アップを得て、仕掛け花火・尺玉（直径三〇センチ玉）など

華々しく打ち上げられたということでした。草ぶき屋根の家並みが多い頃でしたので、打ち上げ時の火消し、翌日の実行委員（役員）さんによる被害者の陳謝訪問が大変だったそうです。

さて、以上の「金沢観光まつり」花火大会（カーニバル）が突然その灯を消すことになったのは、その開催場所であった平潟湾が、埋立計画による線引の対象地域となったからです。

埋立計画後約一〇年たった昭和五十年、人口も第一二回国勢調査結果によれば一三五、三五〇人にふくれあがりました。昭和二十三年の人口の二倍以上に増



えたこととなります。区内の各地で急速な開発が行われ、新住民（新しい区民）が移り住むことになったのです。このよきな現象は、ただ金沢区だけに起きたわけではなく、横浜市内各地で生じたので

そこで、行政側でも、住民側でも自治会、町内会組織の重要さ、その在り方などを慎重に考える時期を迎えたと言えるでしょう。

昭和四十八年から、京浜間唯一の海水浴場として賑わった野島海岸も、広大な埋立事業の影響を受けて閉鎖され、区民のいこいの場がまた一つなくなつて、観光協会の事業もまたまた奪われてしまひ、細々と野島公園内にある県の青少年研修センター内と他に一カ所で売店をもつだけとなりました。

また、新住民と旧住民とのふれあひと連帯を求める気運が、自治会町内会組織の内・外にも生まれてき、行政側としても、その気運に乗って諸々の区政事業への参加はもとより、区の存在そのものを目を向けてもらいたいという期待感も多

分にあつたと考えられます。

このような状況のなかで、昭和五十年六月、かねてから各区に先がけて区民参加行事を実施している西区の「虫の音を聞く会」（昭和四十年頃から始まり現在継続中）に刺激され、及ばずながら金沢区でもできないか、ということでも眠りかけていた観光協会の総会を開催し、仮称「金沢まつり」の開催についての議題をかかげる運びになりました。

同年七月四日開催された会合通知文の「趣旨」文は次のとおりです。

金沢区は、今を去る約八〇〇年まえ、源頼朝が鎌倉に幕府を開いた頃より幕府要衝の地として栄え、以来数々の歴史上の脚光を浴び、なかでも近代日本の基礎を築いた明治憲法草創の地となるなど常にその時代の政治や文化の一翼を担う役割を演ずる舞台となつてきたところです。

また、学問の殿堂であつた金沢文庫には向学の士が遊学する一方、気候温暖にして風光明媚なところから数知れぬ文人墨客が訪れ、この地の美しさに心酔し、詩歌をものするなど、学問及び文化の地の名をほしいままにしてきたところです。

そして、このことは、一方においてこの地の自然と、自然との調和による先人のこころが育みそだてたものにはかならないと言えます。

すなわち、自然と調和した人々のこころは、その発露としてやがて行事やまつりとなり、行事やまつりはまた、人々のこころを自然へと近づけ融和させ訪れた人々にやすらぎを与えたと違ひないからです。

私達区民は、近年の急激な都市化の影響を受けて失われてゆくこころの豊かさを再びこの金沢にとりもどし、自然と対立するのではなく自然と人間との調和による「美しいまち金沢」づくりの行事の一つとして仮称「金沢まつり」を区民総ぐるみで開催いたします。

そして、この金沢まつりは、主催は金沢観光協会（金沢まつり実行委員会）とし、協賛として、区連合町内会長連絡協議会、自治会・町内会九九団体、区婦人団体連絡会、金沢ライオンズクラブ、金沢ロータリークラブ、区商店街連合会、金沢消防団など多くの団体が参加し、朝日新聞社、神奈川新聞社、京浜急行電鉄（株）および市の後援で行われることとなりました。

また、内容としては、「虫の音を聞く会」「ミス金沢コンテスト」「金沢まつりパレード」「納涼民謡踊り大会」「のど自慢大会」「郷土芸能（お囃子・手古舞）」「花火の打上げ」「模擬店」など

二——新しい「金沢まつり」の復活

分にあつたと考えられます。

このような状況のなかで、昭和五十年六月、かねてから各区に先がけて区民参加行事を実施している西区の「虫の音を聞く会」（昭和四十年頃から始まり現在継続中）に刺激され、及ばずながら金沢区でもできないか、ということでも眠りかけていた観光協会の総会を開催し、仮称「金沢まつり」の開催についての議題をかかげる運びになりました。

同年七月四日開催された会合通知文の「趣旨」文は次のとおりです。

金沢区は、今を去る約八〇〇年まえ、源頼朝が鎌倉に幕府を開いた頃より幕府要衝の地として栄え、以来数々の歴史上の脚光を浴び、なかでも近代日本の基礎を築いた明治憲法草創の地となるなど常にその時代の政治や文化の一翼を担う役割を演ずる舞台となつてきたところです。

また、学問の殿堂であつた金沢文庫には向学の士が遊学する一方、気候温暖にして風光明媚なところから数知れぬ文人墨客が訪れ、この地の美しさに心酔し、詩歌をものするなど、学問及び文化の地の名をほしいままにしてきたところです。

そして、このことは、一方においてこの地の自然と、自然との調和による先人のこころが育みそだてたものにはかならないと言えます。

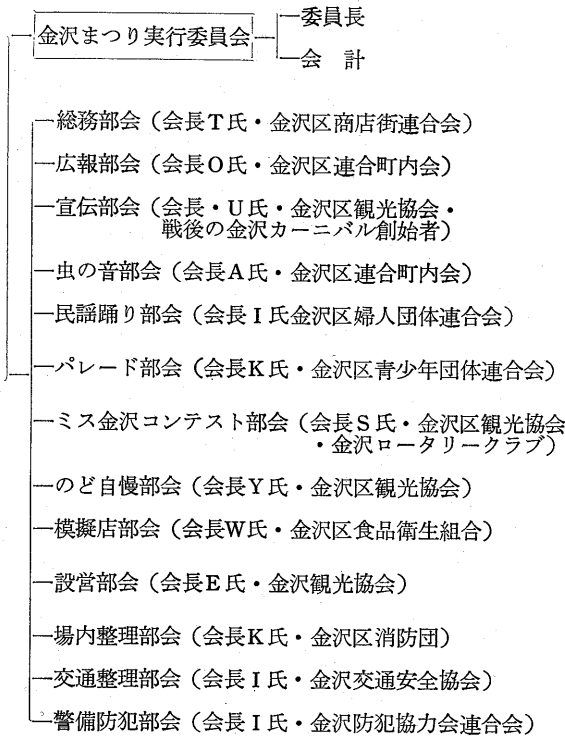
すなわち、自然と調和した人々のこころは、その発露としてやがて行事やまつりとなり、行事やまつりはまた、人々のこころを自然へと近づけ融和させ訪れた人々にやすらぎを与えたと違ひないからです。

私達区民は、近年の急激な都市化の影響を受けて失われてゆくこころの豊かさを再びこの金沢にとりもどし、自然と対立するのではなく自然と人間との調和による「美しいまち金沢」づくりの行事の一つとして仮称「金沢まつり」を区民総ぐるみで開催いたします。

そして、この金沢まつりは、主催は金沢観光協会（金沢まつり実行委員会）とし、協賛として、区連合町内会長連絡協議会、自治会・町内会九九団体、区婦人団体連絡会、金沢ライオンズクラブ、金沢ロータリークラブ、区商店街連合会、金沢消防団など多くの団体が参加し、朝日新聞社、神奈川新聞社、京浜急行電鉄（株）および市の後援で行われることとなりました。

また、内容としては、「虫の音を聞く会」「ミス金沢コンテスト」「金沢まつりパレード」「納涼民謡踊り大会」「のど自慢大会」「郷土芸能（お囃子・手古舞）」「花火の打上げ」「模擬店」など

表一 1 まつりの組織 (第1回)



で、会場としては野島公園一円が選ばれました。

以上のとおり第一回「金沢まつり」が行われたのですが、なにしろ初めてづくしの行事であり、内容も盛りだくさんで、資金の調達、会場設営(舞台づくり、移動トイレ、仮設電話、救護所の設置、最終日の資材撤去と清掃)など苦勞の連続だったと思われます。

特に大変だったのは「虫」のことで購入先は東京の葛飾にある虫業者で、ズブ・クツワ虫・エンマコオロギなど一、三〇〇匹を前日に購入し区庁舎に一晚置いたわけですが、夜中はもとより翌朝か

ら夕方にかけて虫の鳴く声が庁舎内に響きわたるやら逃げだす虫がいるやらで係職員はてんでこ無い。当日の夕方から野島山に放たれて、区民が優雅な気分で虫の音に聞きほれる情ちょうとは裏腹に、区職員はもう二度とこの催しはご勘弁、と思つたそりです。そのせいもあつてか第二回目から姿を消しております。

さて、第一回目は話のきっかけが当時の金沢区連合町内会会長の水野さん(故人)から出たこともあつて、区役所の市民課三係総動員で事に当たつたそりです。金沢観光協会が主催し、宇野忠夫先生を協会長に選出、まつり実行委員長と

して活躍されたわけですが、現在に至るまでこの役が引き継がれてきています。市民課職員総動員はもとより、自治会・町内会をはじめ区内の組織が結集し、準備にあたりました。一三の部会別に部長が割り振られました。一三の部会別に部の通りです。

この割り振りは(最近では各部会に区役所の各課長さんがお手伝いとして参加しています)現在になつても多少の変更がなされただけで、そのまま踏襲されています。この裏側では、金沢警察署をはじめとして緑政局南部公園緑地事務所、環境事業局金沢事務所、水道局金沢営業所、道路局金沢土木事務所、東京電力金沢営業所がそれぞれの立場での協力がありました。各部会ごとの取り組み方も、初めてのことなので相当な重みを感じての役割分担であつたと思います。

三 一〇年の歩みの中で

① まつりの意義と変遷

趣旨文の中にも、区民総ぐるみでの開催をうたつており、区役所職員はまったく実行委員会事務局職員としての立場のみでの参加・協力がたてまえであります。が、実際に企画・実施が各部長さんを中心に行われるようになるまでには、やはりかなりの年数を重ねる必要が

あつたようです。このような区内の多くの組織が参加するまつりを行うことにどのような意義があるのでしょうか。

史跡・文化財を背景に、自然公園、海の公園(島部・浜部)など、他区にない貴重な資源をもっている金沢区が、観光振興を目的とした行事を催すことはそれなりに意義があります。

また、区民総ぐるみでの「区民まつり」を考えた場合、新・旧住民の融和、区内各種団体の連携、「わが街づくり」にもなう区民としての郷土意識の昂揚、金沢区のイメージづくりなど、横浜市が行政として意図した、「区民自らの手による、区民相互の交流を深めるための「まつり」であり、新たな郷土愛を育て、自治と連帯を高める」という点で大きな意義のあるものと考えられます。

ここで、この一〇年間で定着した「まつり」の移り変わりについて述べてみましょう。

「虫の音を聞く会」は二回目から無くなりました。労多くして益少なだったのでしようか、あるいは、他区の真似ごととに抵抗があつたのでしようか。

「のど自慢大会」は昭和五十五年の第六回で打ち切られましたが本年度第一回は「カラオケ大会」としてブームに乗って再登場しました。金沢区出身シャ

写真一 宿町内会の屋台



写真一 瀬戸町内会の山車



ンソン歌手成瀬晴代さんの友情出演もあって盛り上がり、好評でした。
「ミス金沢コンテスト」も「金沢まつり」のメイン・イベントとして昨年の一〇回まで続いてきました。「金沢区内の観光行事等に好印象を与えるにふさわしい女性」ということで毎年三人を選出し、選ばれた「ミス金沢」はオープンカーで区内一円披露パレードを行い、その後一年間、区内主要行事に出たいただい
ておりました。一〇回で打切りになりま

したが、その理由としては①応募者が少なくなつたこと、②担当する商店街連合会の負担も相当なものになつてしまったこと、③一年間の参加する行事も少なくなつてしまったこと、などがあげられます。将来、海の公園完成の暁には、「海のカーニバル」と銘うって、「カーニバルの女王」選出というような違った形での方向転換を期待したいと思ひます。
「郷土芸能大会」の始まりは、野島公園の仮設舞台で、「野島ばやし」、面を

つづけての釜利谷の「手古舞」など各保存会による日頃の練習の成果をいかんなく発揮、金沢独特の郷愁をかもし出してくれたようです。第二回目からはいよいよ山車・屋台の登場です。区

内各地区に古くから伝わる山車・屋台に加えて、はやし、手古舞、木やりなどが色を添えて区役所横に集結、夕方になると提灯にあかりがともされ、地域色豊かな演技が競われると、お祭りが最高潮に達するわけです。昭和五十一年度（第二回金沢まつり）に繰り出した山車・屋台は瀬戸・三双・川・洲崎・町屋・寺前・宿の七台でしたが、昭和五十九年（第一〇回）には念願だった国道一六号の新道をパレードできるとあって、新しく六浦陸・野島・谷津の三台が加わり合計一〇台にまでふくれあがりました。この郷土芸能は、金沢の地にとっては、かけがえない貴重な財産（文化財）です（はやしは、市教育委員会から民俗芸能の指定を受けている）。今後とも各地区で

の保存について心が配られることを望みたい。

「花火打上げ(大会)」は、かつては全国的(?)にも有名な行事であったようですが、その復活のきざしは第二回目の「花火打上げ」から見え始めました。

第一回目の花火は、「虫の声を聞く会」の行事に添えられた小規模での打上げだったそうで、野島山の山頂で散発的に上げられました。第二回目からは場所も三号地理立区城内のポンプ場地先に移して三五〇発が打ち上げられました。以後、回を重ねるごとに、規模が大きくなり、「金沢まつり花火大会」も、他の行事ともども定着をみたわけです。

①「区民まつり」の課題

②マンネリ化からの脱却・内容の工夫

どの行事にも言えることですが、回数を重ねるごとに新鮮味がなくなります。「金沢まつり」も今日に至るまでには、紆余曲折がありました。「ミス金沢コンテスト」を打ち切ったり、「のど自慢大会」が中止されていたのを「カラオケ大会」と銘うって内容を変えての復活がみられたことなど、その年度の実行委員会、毎年真剣に内容の検討を行いマンネリ防止に配慮してきました。

また、「パレード」部会では、念願の一六号線(新道)の通行許可が警察の協

力で達成でき、仮装・フロートのパレードを加味でき、山車も参加させたりして彩りを添えてみたり、「花火」部会では、願望の尺玉を、スポンサーつきにして、本年度では県下最大規模にするこゝろができ、新鮮味を加えてきました。今後ともまつりを続けるためにはたえざる反省と工夫を毎回繰り返すことがぜひとも必要になります。

また改善すべき課題としては、「郷土芸能(山車)部会」に関して、山車についている提灯が、昼間のパレード参加に伴って、あかりがともされることがなく「祭り」らしい雰囲気が半減しているということと、自動車の交通量激増が原因とはいえ、できれば夕方から夜にかけて行えばムードがもっと盛り上がるのではと思われず。

④財政面での課題
行事には予算がついてまいります。また、その上限も際限がありません。「区民まつり」には市から二〇〇万円の補助がありますが、これだけでは満足できない区と、十分過ぎる区もあるようです。「金沢まつり」では、毎年増えていく予算のなかで、その六〇%が花火打上げに充たされていますが、定着した「花火大会」とはいえ、今後さらに経費が増えていくことが予想され、これらの財源を確保することが課題となります。

また、実行委員会が毎年度計上する予算外に、隠れた経費が存在することもあります。「郷土芸能(山車)部会」では、一台あたり五万円が配分されますが、毎回予算増額要望の声が聞かれました。それではと出場台数を半減して一台一〇万円配分という事務局案が提示されると、「とんでもない、五万円の配分なんか当てにしない、地元で三〇万円の予算を組んであって、金沢まつりに参加することを首を長くして楽しみに待っているんだ」という発言があつて結局例年どおり実行することになったのです。

このエピソードは区民の自主的・積極的な参加意欲の表われであり、喜ばしいことでありますが、一方、このような目に見えない多くの負担がなされていることを考慮しながら、今後まつりを運営していくかねばという認識をおこさせることがらでもあります。

⑤人手のこと
経費同様、行事には人手が必要なことは言うまでもありません。各区の「区民まつり」は、この人手を支えられて成り立っているのです。区によっては担当する主管課がそれぞれ異なっているようです。金沢区では、市民課の地域振興係がこの任に当たっていますが、各部会には区役所の全課長さんが割りふられて、主としてまとめ役になってもらっています。

図一 第11回金沢まつりのチラシ

第11回 金沢まつり

期日=8月17日18日 (土) (日)

夏の華
金沢まつり花火大会
18日(日)19:30~20:30
(新三楽庭)
尺玉、スターマイン
水中花火
仕掛け(ナイヤガラ)
など800発

「まちとむら」の交流祭典
18日(日)8:00~10:00
地区センターグラウンド

世界の人情展
17日(土)18日(日) 金沢区民会館

インフガコンサ
金沢
18日(日)17:00~18:30
アソビ(800発)の発表もあります。

華国民謡大会
17日(土)10:00~15:00金沢公会堂

かろおケ大会
17日(土)13:00金沢公会堂

民謡踊り大会
17日(土)18日(日)18:00~21:00
民謡踊りバス発着広場

金沢まつりパレード 18日(日)14:00~16:00 ポート・エンジェルズ119、ミス横浜、子供会鼓笛・パトロン、郷土芸能山車8台etc 総勢1,500名参加

主催 金沢まつり実行委員会
問合せ 金沢区役所福祉部市民課地域振興係内
電話(782)1212 内線 321・322

回									
覧									

*席での御来場は遠慮ください。

す。部会の行事内容によっては若干そのかわり方もいろいろです。

たとえば、「カラオケ」部会は、金沢区商店街連合会が担当していますが、実行委員会の方針をもとに、区商連の役員と担当課との打合せを何回も重ねて、出場者の人数、アトラクションの内容検討を行います。出場者の受付とプログラムの作成は担当課が手伝うだけ当日は商店街の皆さんがそろいのはっぴで、すべてのスケジュールをこなします。

すべての部会が行政側の職員で担当して、地域の人は役員に名ばかり連ねているようでは、どの行事でも長続きは望めないでしょう。

㊤ 区民総ぐるみのまつりへ

これまで、金沢まつりは主として区役所周辺地域を中心として行ってきました。そのため、釜利谷地区や富岡地区などから見ると、少し距離が感じられるという意見もあり、区民総ぐるみというためには不十分な点もまだまだあるようです。

今後は、これら各地区により密着し、各地区の盛り上がり基礎としたまつりとなるよう、より一層の工夫が必要だと

考えられます。

四 「金沢まつり」のこれから

昭和五十五年、杉田に隣接する埋立地の鳥浜工業団地に一〇〇を越える企業が進出し、その振興策の一端として「鳥浜工業団地・団地まつり」が企画され「金沢まつり」協賛事業として毎年行われることになりました。

次いで埋立二号地に誘致された企業体で組織された協同組合・横浜マーチャングデザインセンター(MDC)が主催する「MDC夏祭り」が、昭和五十八年度から始まって今年で三回目を迎えました。

鳥浜では団地内従業員の福利厚生が主なねらいになっておりますが、「MDC夏祭り」はそれに加え、近隣住宅団地との交流・融和を目的としたもので、住宅団地からの住民参加を主にして呼びかけを行っています。盆踊り、チャリティーバザー、子ども花火大会、夜店、模擬店など姉妹市金沢産業振興センター後援で、これも年々実を上げております。盆踊りには金沢区婦人団体が協力して指導と実演を行うなど、金沢区内に融けこむ

ための努力もしています。

また、並木町団地で結成されている「金沢シーサイドタウン連合自治会」が主催する住民自治の高揚を目的として「子どもらふるさと・住み良い街」づくりを旗じるしに「金沢シーサイドタウン祭り」が昭和五十五年から始まって今年で六回目を数えます。

第一回は「金沢まつり」協賛で盆踊りが主体でしたが、今年は大変な盛りあがりが見られました。

同地区内の社会福祉協議会と近隣商業団体が共催して八月二十三日が前夜祭、二四日、二五日が本祭でたっぷり行事が仕組まれました。それも各種目がそれぞれ団地内の自治会と諸団体がすべて担当されています。その内容は、並木太鼓、盆踊り、花火打ち上げ、手造りの夜店、おはやし、オークションなど多彩な展開がなされています。

以上の三つの行事は、区内でも目立った存在であります。特に「金沢シーサイドタウン祭り」などは金沢まつりのミニ版などと侮れない内容と手法で実行しているわけです。これからも、これにのりつた各地区での祭り行事が、ただの盆踊り

だけでなく、住民あげてのよりよい地域づくりのための契機となるような実のあるものに成長していくことが望まれます。昔から伝統的に行われている旧地域での神社を中心とした祭り行事のほか、区民の新しい祭りへの熱い思いが流れているように思われます。このような区民の熱い思いを「金沢まつり」にうまく結実していくよう、今後も考えていかねばなりません。

そして、「まつり」という言葉の本源を探ると大変むずかしくなりますが、少なくとも、行政が行事として定着させようと願望した区民による、区民のための「区民まつり」のねらいをさらに掘り起こさねばなりません。

新旧住民のふれあい、連帯感の醸成、地域経済の振興、誰にも誇れる街づくり、金沢区のイメージづくり、発展途上にある金沢、区民の金沢区に対する理解度、観光金沢の再生、都市(金沢)における「まつり」の在り方など、区民も区の行政に携わる人も、ともに考えていかねばならない道程が、まだまだ続いていることでしょう。

△金沢区福祉部市民課長V